

多文化理解授業のための演劇作成の可能性
Possibility of Drama Making for Multi-Cultural Understanding Class

印道緑, 北九州市立大学
Midori Indoh, The University of Kitakyushu

1. はじめに

本論の目的は、留学生の多文化理解の促進を目的とした授業『異文化講読』の最終課題である日本語劇の作成と発表に関して、学習者がどのようなプロセスを通して課題を達成したかを明らかにすることである。そのために、次の2つの主題を設定した。

- ① 『異文化講読』という内容重視の授業の「読解」から「日本語劇の作成と発表」に至る教室活動の工夫。
- ② 「読解による異文化理解」から「劇の作成・発表という発信能力の獲得」に至る過程を明らかにすること。その際、学習者の意識の変化に焦点を当てる。

①の教室活動の工夫についてはブレインストーミング的グループ活動の活用を中心に述べる。ブレインストーミング的グループ活動とは、簡単に言うと、グループのメンバーが1つの課題に向けて自由な討論や質疑応答によってあらゆる方向から思考し、有効な解決策を引き出し、課題を達成するという手法である。②の発信のプロセスを明らかにする方法としては、授業の様々な段階において収集した学習日誌を活用した。「異文化理解」に向けての過程については、読解前に記述する「インタビューシート」と読解の授業の前に宿題として記述する「読解シート」、「劇の作成・発表」に至る過程については、ブレインストーミング的グループ活動の後に記述する「今日の気づきシート」を活用した。

これらの学習日誌を子細に観察し、分析することによって、異文化理解から劇の作成・発表、つまり発信に至るまでの学習者の意識の変化が浮き彫りにされ、課題達成のプロセスをより明確に表すことができるものと思われる。

2. なぜ異文化理解のための教育に演劇的手法を用いるのか

演劇的手法の活用に関する先行研究には、様々な分野への活用をめぐるものがある。まず、日本語教育への応用に関するものとしては、川口（2009, 2012）、野呂（2009, 2012）、平田（2009）、惟任（2013）、杉山（2014）等がある。また、コミュニケーション教育への応用としては、谷口（2007）、野呂（2009）、平田（2010,2012）、青柳ほか（2013）等がみられる。

さらに、演劇だけでなく、ケーブルテレビ等の映像番組制作や地域の多文化共生イベントの体験学習なども含めた多様なプロジェクトの異文化理解教育への応用を取り上げたものとして、塚本（2010）、Gehrtz-Misumi（2016）、バンクス（2017）、有田（2015）等がある。

本研究は、第3のグループの研究に含まれると思われる。これらの研究で共通している点は、留学生だけでなく、地域に在住している外国人や帰国子女も含め

た学習者がどのようにして様々な問題を解決し、また、生活している地域に適応していくかという問題点を認識し、そこを研究の出発点にしている点である。それを解明していくには、学習者が過去においてどのように行動したか、あるいは将来に向けてどのように行動するかという問題意識と、その過程で学習者の意識がどのように変化していくのかという視点が必要となる。つまり、学習者に「発信の能力」を獲得する必要性を認識してもらうことが、彼らの問題を解決し、ある程度の自信を持って地域で生活していくための必要条件となるのではないだろうか。本研究では、異文化理解教育を、ただ理解する能力を獲得するだけでなく、理解した上でどのように行動していくのかを含めた教育であるととらえ、読解によって「理解する能力」と演劇の作成・発表によって「行動（発信）する能力」を獲得する過程において、学習者にどのような意識の変化が生じたかに焦点を当てる。

3.ブレインストーミング的グループ活動とは

ブレインストームという言葉はニューヨークの広告マンだった A.F.Osborn による造語であり、彼はその著作『*Applied Imagination*』（1953）の中で、どんなに消極的な性格の人でも創造的に思考することができる手法としてブレインストーミングを紹介した。授業実践のツールとして用いるブレインストーミングの特徴としては、一般的に次の4つが挙げられる。①ある意見に対して批判したり、反対意見を述べたりしない。②空想的あるいは風変わりなアイデアも排除しない。③アイデアの量は多ければ多いほどいい。④メンバー間のアイデアを蓄積していき、より充実したアイデアを構築する。さらに、この4条件に加え、5番目の条件として「時間管理」を付け加えることも有効だと考えられている。ある活動において制限時間が決まっていると、そこにゲーム性が加わり、参加者はより積極性を発揮し、結果を出そうとする。これらの5つの条件を満たすことにより、ブレインストーミングの特徴が明らかになる。つまり、ブレインストーミングは「アイデアや意見をまとめ、ある結論を出す」ことだけが目的のではなく、「ありふれた単純なアイデアから、より創造的で奇抜なアイデアまでさまざまなアイデアを自由に発表し、蓄積し、組み合わせることによって、課題を見極め、効率的により独創的なものを作る」ための手法だといえよう。

4. 授業の概要

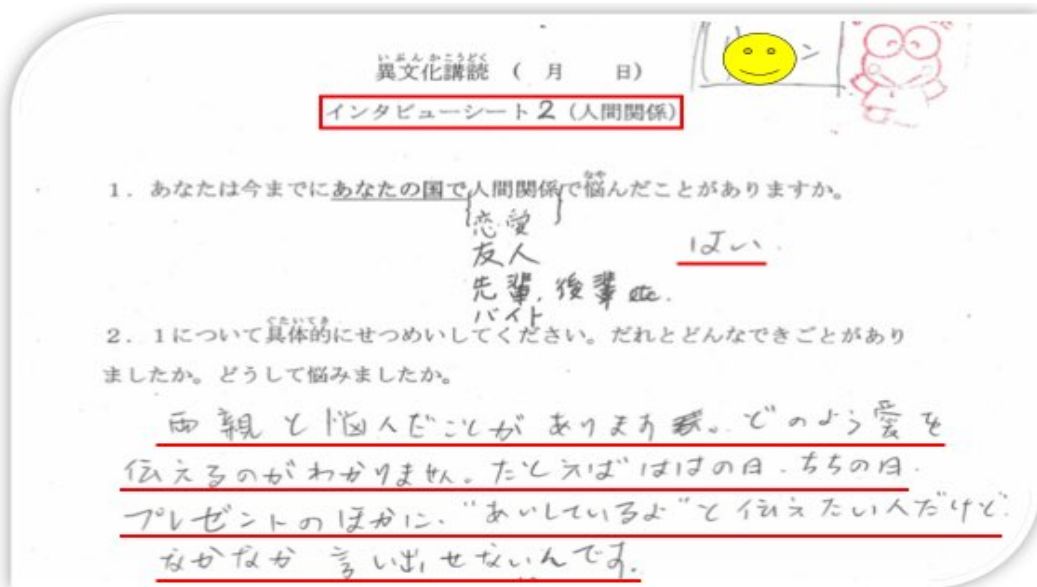
4.1 授業の流れと内容

授業の流れとしては以下の4段階がある。

段階 1) 「読解」前のウォーミングアップのブレインストーミング的グループ活動①（以下「BS活動」と表記する）

下のようなインタビューシートを用い、その読解のテーマについて各自の経験や意見を宿題としてまとめておく。BS活動では、ペアでインタビューし合った後、グループで発表し、質疑応答と討論によって情報を共有する。

図1. インタビューシート例



段階2) 授業で行う「読解」のためのBS活動②

「読解」のためのBS活動では、まず、各自が宿題としてテキストの質問のページに答えや意見を記入しておく。次の図と絵はテキスト『留学生のためのケースで学ぶ日本語』（ココ出版）の質問ページの問題の一部と学生の解答である。授業で問題文の読解をした後、BS活動で各自の答えと意見を発表し、グループ内で情報を共有する。その後、この読解文に提起されている異文化摩擦の問題解決法をグループで議論する。シール投票等で最も得票率の高い解決法を選び、全体活動で発表することもある。（絵はテキスト13ページ、問題1と4は14ページと15ページから抜粋したものである。）

図2. 読解シート例

*** 読解シート ***

1. あなたがAさんの立場だったら、どうすると思いますか。それは、どうしてですか。
まずはBさんに値段が夜更けに高い理由を聞きます。
 その理由が私にも理解できれば、ここからはなんとかして、我慢する(例えば、耳を塞いで、寝る前に耳につける)。納得できない理由でしたら、他に他の時間帯に高い理由を聞いてもらいたいと思います。 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲

4. AさんがBさんに文藝さんに驚かせる場合、どのように話したらいいでしょうか。
話の面白い部分で話したら、取り上げられやすいと思います。
 例を上げれば、「Bさん、最近お花見(お花見)ようですね、いつもより遅く帰って、深夜まで寝られなかったよって、「大丈夫ですか?」のように話したら、BさんもAさんの気持ちに気付くと私は思います。 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲

段階3) 全体発表と質疑応答

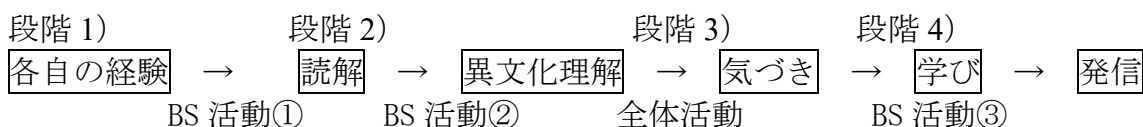
全体発表では、BS 活動①と②の内容をまとめてクラス全体に発表することで、各自が欠けている情報を補充し、多様な視点を共有する。それによって、学習者がそれぞれの「気づき」を認識する。

ここまでの活動 1) 2) 3) によって、「異文化理解」から各自の「気づき」への過程をたどることが可能となる。最後の段階 4) は、この授業の主要な活動である日本語劇の作成と発表のための BS 活動③が中心である。

段階4) 日本語劇作成・発表のための BS 活動③

1) から 3) の過程で得られた「知見」や「気づき」をもとに各グループで 10 分程度の日本語劇を台本から作成し、留学生のさよならパーティーで日本人ゲストの前で発表するという課題を達成する。この段階 4) によって学習者それぞれの「気づき」から、「新しい発見」つまり「学び」を経て「発信能力の獲得」までの過程をたどることができる。この段階 4) の BS 活動③については次章で詳述する。授業の流れを図式化すると次のようになる。

図 3. 授業の流れ



4.2 授業の対象とグループ構成

- 1) 今学期の受講留学生：中国、韓国、タイ、カンボジア、イギリス、台湾、アメリカの短期留学生 29 名。日本語能力は N3 レベル以上。
- 2) 1 グループは 8 人から 10 人程度。各グループに日本人学生のボランティア 1 人～2 人が参加。中級から上級まで日本語能力に差があるため、リーダーと日本人ボランティアには日本語能力の低い留学生への配慮をするよう伝える。

5. 「理解」から「発信」に向けてのブレインストーミング

5.1 日本語劇作成の目的と内容

作成の目的は 2 つあり、一つは、読解による知識や学習者自身の経験、意見をもとにした BS 活動①②によって、「異文化理解能力」と「問題解決能力」を獲得することである。二つ目は、得られた 2 つの能力を駆使して行う BS 活動③によって、最終的に「劇の主題」つまり「発信の糸口」と「劇を遂行する」ための「発信能力」を獲得することである。

図 4. 目的①

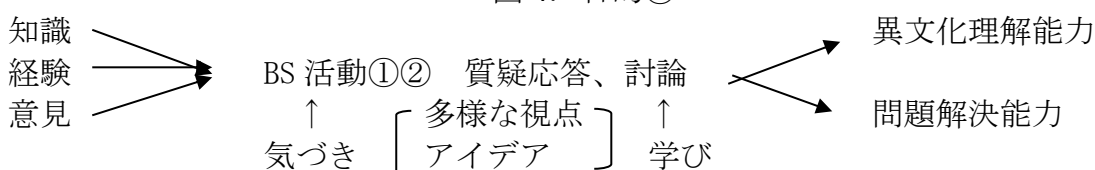
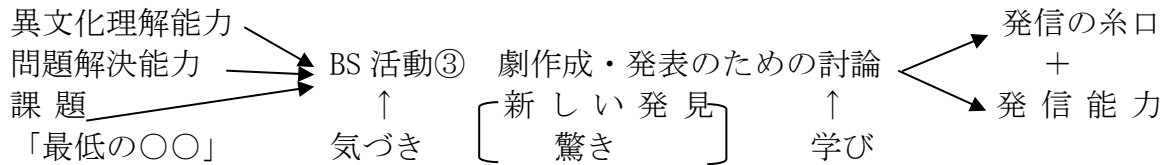


図 5. 目的②



日本語劇作成の内容は「日本社会において、一見短所だと思われることも、創造的なアイデアと発想の転換によって視点を変えれば、長所にもなりうる」というものである。

5.2 劇作成のためのウォーミングアップのブレインストーミング

先に述べた劇の内容を踏まえて、第4章で述べた授業の流れの段階4)のBS活動③について詳述する。BS活動③には2種類の活動がある。一つはここで述べるウォーミングアップのBS活動で、もう一つは実際の日本語劇作成のためのBS活動である。上の目的②の図に、課題「最低の〇〇」とあるが、ウォーミングアップのBS活動では、この課題で次のようなBS活動を行う。テーマ例として「最低の旅館」を取り上げてみる。

- 1) まず、各グループで「最低の旅館」について様々なアイデアを出し、数枚の絵とナレーションをつけて全体活動で発表する。
- 2) 次にグループワークに戻り、「最低の旅館」だと思われたものが、実は、創造的なアイデアと多様な視点から価値観を転換させて見れば、「最高の旅館」にもなりえたというストーリーを作る。旅館のCMを作り、全体活動で発表する。
- 3) 全体活動で、シール投票を行ってCMナンバーワンを決めても面白い。

では、なぜ「最低の〇〇」なのだろうか。「真にふさわしいアイデアは、見るからにそれらしいアイデアの正反対であることが多い。」これはブレインストーミングの生みの親であるOsbornのことばである。確かに、「最低の〇〇」という題だと、学習者の経験をベースとして様々なストーリーが生み出されてくる。また、どれ一つとして同じような話がないのもその特徴である。

5.3 日本語劇作成のためのブレインストーミング

次に、実際の劇作成のためのBS活動について説明する。

- 1) 方法は基本的にウォーミングアップのBS活動と同じで、まず、学習者に「最低の〇〇」という題で400字程度の作文を書かせる。
- 2) BS活動では、その作文を各自発表し、討論しながら劇の内容を詰めていく。「最低の〇〇」だと思われていたものが、創造的なアイデアと多様な視点からの価値観の転換によって、最終的には「最高の、あるいは、まあまあの〇〇だった」というハッピーエンドの劇を作成する。
- 3) 今までに挙げられた「最低の〇〇」の例の一部である。
 - ・日本語で話しかけているのに、「英語はダメダメ」といって逃げる日本人。
 - ・就業時間を守らないブラックな会社で長時間働いて過労死する日本人。
 - ・仕事中毒の父親と不満だらけの母親、ゲームオタクの兄と引き籠りの妹の家族

6. 学習者は発信の糸口をどうやって見つけたか

6.1 「変わる」ということ：「気づき」と「学び」

ここでは、「気づき」と「学び」の定義をみていこう。辞書によると「気づく」とは、「そこにそのものが有ることや、そのような状態であることを何かのきっかけで改めて知る。」また、「学ぶ」とは、「教わる通りに、本を読んだり、物事を考えたり、技芸を覚えたりする。」（ともに新明解国語辞典）一方、ネット上のブログなどを含めて最近の使われ方を見てみると、「気づきを学びに変えるためには、気づきを自分の言葉にして自分なりに解釈することが大切だ。」「ただ気づきただけでは自分を変えることはできない。」（ともに村瀬裕一）「学びとは、自分から『こうありたい』自分になること。」（佐伯胖）これらの「学び」をめぐる議論の背景には、1990年代から2000年代にかけての「学び論」や「企業研修のための方法論」の隆盛がある。これらの議論を受けて、ここでは「気づきとは自分の言葉にすることで意識化したことから」「学びとはその前後で自分が変わること」と定義することにする。

6.2 「気づき」から「学び」の過程

では、実際に学習者が書いたものを参考にして、「気づき」から「学び」への過程を見ていく。まず、「気づき」についてはインタビューシートと読解シートに第一段階の気づき1があることが分かる。インタビューシートからは「自分自身の経験を言葉にすることによる気づき」、読解シートからは「自分の答えや意見を言葉にすることによる気づき」である。次に、BS活動①、②によって、グループ内で討論し、相互に意見を授受することで、第二段階の気づき2が生じ、時に驚きを伴った発見が生じることもある。その結果、自分なりの意見を持つことが可能となり、それを繰り返すことで「学び」となるものと考えられる。

図6. 「気づき」と「学び」

差別	又	い	ど	め	の	対	象	に	反	り	な	る	区	別	。	ま	じ	め				
と	勤	勉	は	日	本	人	が	私	の	頭	に	残	り	た	印	象	過	労	死	は		
日	本	に	は	常	し	し	。	反	正	の	よ	う	に	頑	強	の	可	き				
で	働	い	く	の	は	前	理	解	で	手	取	ら	れ	た	が	二	の	階	階	に	よ	
っ	て	大	切	な	家	族	の	た	ま	ま	と	い	う	原	因	が	分	か	ら	な	っ	
た	。	た	も	死	ぬ	ま	ど	ま	ど	働	い	く	の	は	や	は	り	や	り	可	き	る
ん	故	は	な	い	か	な	と	思	っ	て	い	る	命	と	健	康	は	何	よ	り		
だ	。	病	気	に	取	り	ま	け	ら	れ	る	反	ら	任	ず	し	て	も	意	味	な	い
な	い	。																				

「最低の過労死」という題で課題レポートを書いた学習者は、「なぜ過労死するまで働くのか」という問いに対して、「前に、日本人はまじめで勤勉だという印象があった」という気づき1を得た。次に、BS活動で他の学生の「それは大切な家族のためじゃないかな」という意見を聞いて、気づき2として「なるほど、それが原因だったのか」と感じるが、「でも、死ぬまで働くのはやはりおかしい」

という自分なりの結論に至る。このような変遷を経て、「気づき」は自分の意見、つまり「学び」に変わり、さらにグループ討論を経て、「過労死寸前まで働く父親がいるが、家族の気づきにより父親は死なずに済み、家族のきずなが深まる」という劇のテーマの糸口にたどりつくことになるのである。

7. 学習者は劇の作成・発表によって何を学んだかー学習日誌をもとにー

7.1 日本語劇の作成過程における学び

学習者の意識をたどる上で、劇の作成過程では、次の3つの問いを設定した。

1) 劇作成に向けての BS 活動において、異なる価値観を持っているメンバーと協同的な関係を気づいていけるか。学習者の意識は次のようである。

【協同について】

様々な国の留学生が**演劇という目的のために**集まって、一緒に演劇を練習しながら一つという**一体感を感じる**ことができました。考え方や行動は、それぞれ他の**多くの国から集まった留学生たち**がお互いに合わせながら「私たちのグループは一つ」という**共通点**を見つけ、**絆と一体感**を感じ、より仲良くなるきっかけになりました。

2) 自分が劇作成にどのように関わっていくのか、また、自分にはどの部分が担当できるのか。

【仕事について】

私は**リーダー**として、みんなの意見を整えるようにしました。やはりみんなが積極的で、最高の劇を作るため、**様々な意見**を出しましたが、**なかなか大変**でした。**みんなの意見を収斂しよう**とすると、**時間がものすごくかかって**しまって、結局、望みどおりの結果がでませんでした。しかし、みんな忙しかったのに、何度もの会議や練習をして、**最後はみんなが満足**しました。

3) グループという共同体の中で、きっと何か面白いものが見つかるだろうという希望を持って活動を続けられるか。

【面白さについて】

今回はグループを作って、劇について話しました。まず、グループの友達と自分の最悪の〇〇について話しました。人それぞれ、自分が経験したり考えたりしていることが違うのがおもしろかったと思います。**もっともおもしろいと思**っているのはその**意見に共感**できることです。そのため、今からその劇のための**活動が期待**になります。

特に、劇作成の過程において、グループのメンバー間で意見の調整が困難な状態になった時、それを前向きに受け止めて解決方法を探し、活動を続けていけるか。

【困難について】

この演劇からたくさんのを習いました。グループの活動は日本人、韓国人、中国人、イギリス人などのいろいろな国の人が集まっていますが、対話で意見の衝突を解決できました。皆が心を合わせて、一生懸命でした。

7.2 日本語劇の発表による学び

日本語劇の発表前と後とで学習者の意識にどのような変化が生じたのだろうか。

【変化1】

私は軍隊に行き帰ったことがあります。だから、団体的な生活に慣れていまして、今まで、個人の意見より団体の和合が一番重要だと思いましたが、それに、個人の意見を無視することもたくさんありましたが、今度の活動を通じて、それはダメだと思いました。また、今度の活動でもっと個人の意見を尊敬することを習いました。今度の演劇のおかげでいろいろなものを習いました。いい機会だったと思います。

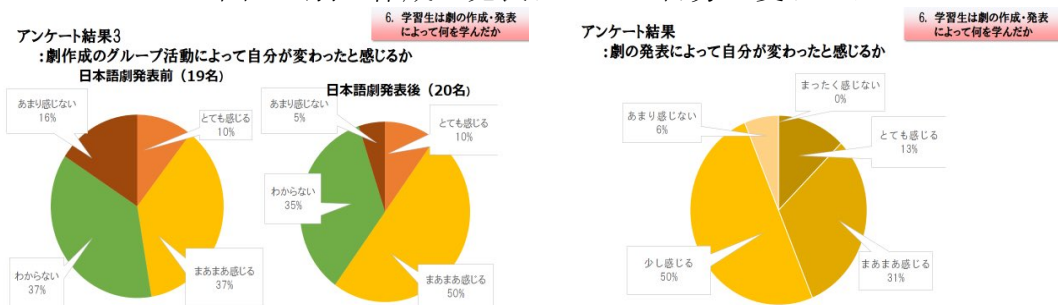
【変化2】

正直に言うと、初めてこの授業の期末試験として、最後に劇を演出する予定を聞いたときに、少し「めんどくさい」と思いました。チームワークなんて、みんなの考え方、時間割、能力とかが全然違いますので、特に、世界的なチームを作れば、言語も違うし、お互いの意味が分かるかと思っていました。しかし、本当に大事なこととして、真面目にみんなと一緒に議論したり、交流したりした時に、私は感動しました。…日本人の考えがまだ時々わかりません。しかし、…理解できない時に交流してみれば、違う文化の考え方を尊重して理解できると思います。

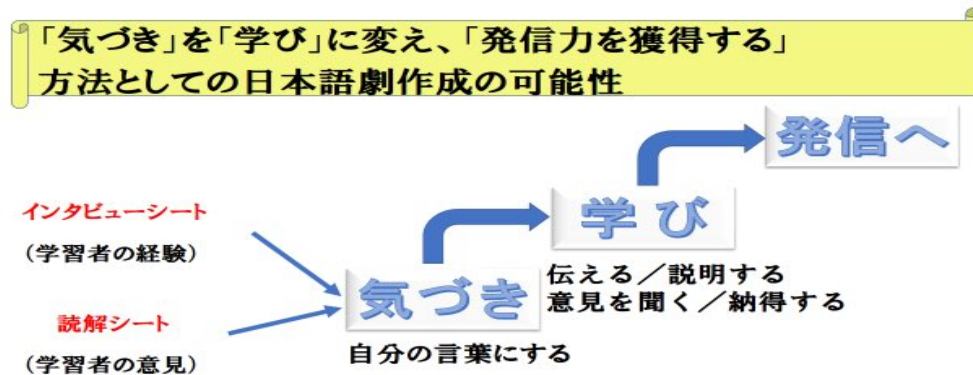
8. まとめ

7章で、劇の発表前後における学習者の意識と学びの様相を見てきたが、発表終了後に「すべてを振り返って」というアンケート調査を行った。結果は以下のとおりである。紙面の関係で「自分が変わったか」という質問の回答のみを示す。

図7. 劇の作成・発表によって自分が変わったか



この結果を見ると、グループ活動によって自分が変わったと答えた学習者数は「とても」と「まあまあ」を合わせると47%から60%に増えており、劇の発表によって変わったかという質問には「とても」から「少し」までを合わせると94%が変わったと答えている。このことから劇の作成・発表によって多くの学習者が何かを学び、それによって発信能力を獲得したと結論づけてもいいのではないだろうか。次の図を持って、この発表の結論としたい。



参考文献

- 川口義一 (2012) 「『文脈化』で学ぶ文法：日本語教育における『演じること』の意味」野呂博子・平田オリザ・川口義一・橋本慎吾 (編) 『ドラマチック日本語コミュニケーション「演劇で学ぶ日本語」リソースブック』第2章, ココ出版, 59-77.
- 谷口直隆 (2007) 「コミュニケーション学習のための演劇—対話劇教材の検討」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第一部第56号, 145-151.
- 塚本美恵子 (2010) 『異文化理解のための映像制作授業～ケーブルテレビ (CATV) の番組制作を通して学ぶ～』『大学教育と情報』2010年度 Vol.19, NO.4.
- 野呂博子 (2012) 「演劇的アプローチでイキイキコミュニケーション」野呂博子・平田オリザ・川口義一・橋本慎吾 (編) 『ドラマチック日本語コミュニケーション「演劇で学ぶ日本語」リソースブック』序章, ココ出版, 10-37.
- バンクス祥恵 (2017) 「初級前半日本事情クラスにおけるドラマを用いた発表活動—日本での困難について語る試み—」『Journal CAJLE』18, 69-89.
- 平田オリザ (2010) 「演劇はコミュニケーション教育に有効か? : コミュニケーションデザイン・センターにおける演劇教育」『OUKA』155-164.
- Gehrtz 三隅友子 (2016) 「留学生との交流による多文化共生のまちづくり—とくしま異文化キャラバン隊の活動を通して—」『ウェブマガジン「留学交流」』2016年7月号 Vol.64.